梅兒譽美

三編

上

へ遠13
839
7

門へ遠3特
請 839
巻 7

梅古与美三編序

夫聖人之物凝滞をず今往訓を求
主人之物年倍天をど騒ぐ式市
中ふ住なぐら倍ゝ迄ゝ能与世推
移る人情を書著きゝ和漢の理

明治三六年十月十八日購求

序

窟てさそきの古文を奪體換骨したる物より
あぐぎ又京と盜くい小袖工仕て稼る先哲
ぢかを借り物ひのびたる只意氣
と世の風りを專とす色も香
もある妻爲書を知すれ這小冊今

三編ひ玉ふ首尾全く整ひこの綴
一言の葉平素作者の意を
みき志意氣して賤のびし且ものを
よくこの優れる所を理實を奇なる妙と
と讃り愛く然るを字を手ぶの序を添る

以男子 うるはし

所謂玉潔を塗り黄金を鏤めたるの

強くも臺を拔く所貴を費やされ

蜻蛉の所爲こゝに盡くるかな

故十返舍一九門人

笑話の

孟春

金鈴舍一寶述

毒老婦
於阿
市郭兒
千葉の藤兵衛

玉質亭〻主歳
寒高標寫寫
固應難坐今ゝ
雪開生面莫作
人間水墨看
輕素

婦多川若町の娼女
黛淡江天
雪故飛竹
阿多吉
婦多川の朱八

籬半掩傍
笞磯清愁
満眼無人
識折得梭
巻獨自歸
貧ね性貧も情の色と思ふ
深雪中一東ふのつきてく解ぬ
さまざま腦口吉ちけと茶碗酒
遠まわりもいとふる角ぼき
角ぼきこいとつよ雁と書き
他の娼女の俠雪

春色梅兒譽美　七之巻

江戸　狂訓亭主人著

第十三齣

戀由来の糸口を恋も誠と實彼婦美川の米八が今日晒
る堀原の抱屋舗の表戸村茶會の寄来る客人へ
敵取殺の彰簡一度揃ひ〜大寄の拵ら他訪屋に
ちょんがるまと人目はくろの箱持さるを丹次郎。結
草卯て勝ゑより庭ふつゞ死し〜花烟月の明ゆうれつ

男ふぐ屋の塀のうとゆ高き兵ゆ拵好せ〜放生
池表の掘側ゆ雲つまそ月ゆ泉ゆの向のへさゞめく
廣庭〜き絵日遊世〜酒真ゆ宮も真くゆも赤潮。
取乱〜くる毛孔孫ゆにとるごとき大きゆ毛を孤ゆく
在ごうゆくと霧乱ゆ時〜もあ生島も
閑〜く久乗る人情何ゆ世ゆうん毒豆みく氏方の殺
折戸突ひ〜きゆ人迎ひゆぐゆ立ゆる丹次郎ゆ彩ゆ生
ゆまゆびつくゆ月影ゆ。ゆ〜るゆめく「丹さんゆ丹「ゆく

お長ハやうやうして此所へト言ても。悲し涙に口ごもりて。
幾言甘まじれバ丹次郎障子をあけて少し気色のうら人
御精入ま抱し　○丹「ヲヽ大そうに動気がするのト胸をなで
おろかせバ所をしづめ　長「アヽ実にとまらうくこそまいハそもとぞま
さぞく丹さんおまへハ其所にお出のぞへ　丹「ヲヽおまへも何ヨそ
「米八さんを案じて此頃屋敷へも一所にあそぶ　丹「ナニ
そのいふ訳じやアねへが米八ハすこし頼んだことがあつて
来たのだそんなことよりおまへハマアどふして又逢て来た。

訳ごト聞れて。お長ハ丹次郎が膝により添　長「今まで
逢く来たのハ此頃屋敷の召使人番場の忠吉さんの若
旦那忠吉さんといふのが。いつもこちらにいろくなことを
いつて無理に自由にするといふて実にモウく否でく
ならないのに今日お客も何も済きたので正体ないのを
幸ひに先刻からつまんでゐたあいだに忍びて来たのが
ソ門を私が隠れさお湯屋へ丁度中に忠さんが隠れ
来て居るもしれぬと思ひ姐さんに御座いました

ゑみこうこう一生懸命に実倒しく義理ぐらいつまでも
出来ないくれぞぞ考えてゐるうちに母さん「そのうちそのうち
関つてこのぐ考へ〳〵とその用人の云ふ通り始終考へ
のみもるるぐらいくらい機嫌の悪る居る「おねいさんト
ひやるぐ丹次郎の顔を見つめ「そのうちでハ私がお家を
行くのいやるを業和でもうるとお思ひ宅へ帰つて新うう
のつとけを吸せバ邪見る母さん由来金ふるうるえ涙へ
言ひきけを欲ひでうり孫子第〳〵良縁を元の宅へ
捨びに来る人の中でも高の貴人へ〳〵おも考へ〳〵くく接
拾して行ぞのらく脳筆善用でも考へのをのつて新メ
ゐることをだうりうえまもつとられハおまえさんへおよまぐぐ
ゐぐくも考へを尽をつのゐるの幸公と測を落を仕来のの
動ぐぐ〳〵ぐうとのそのぐ思つくおそんるさんハ「ゐう考へ
手ず〳〵の間もおあくの工夫を考へ考へけまぐ米八と
遠門く達公先へいうまもせぐ遠慮して居るうう粉〳〵
憲しハつのうぐどゐも「よしハ私ぐのぐ今ふ乱で考へ

うゑ米八さんと中をよくゐきこんまし〜 丹「うゑ世そんゐうゑを
いつく腹をこうのゞ 「うゑとのつく兄さんハ側ゐおもゐでゐい
うゑ世ねハあるまいゐまゞ今私ゞ居る宅の母さんとのハ
ね元ハまゝゑのお縁どんであるまゐョそーてまゝくゐ兄ゞ
コるくうてハ母ゐまゝ〜く小言をいつく堂ゐつゝくうゝく
うゝゐるいけまゞうゑの中ゐハゞうゝてお兄ィさんと一所ゐ
ゐ〜まるゐもあるゞうゝゐ兄堂ゐゐ上をハ便コゝ〜く幸
ゞ〜ゐるのゐまゝさんハ米八さんだうゐ思つく私ゝく

おゝ義へまで送ると逆ひゐおゐ知ゞうのをさても私ゝ義男
おゝと同ゐくひけゐゐゝまやくゐんゞゐゐのョ 丹「そんゐ
つまゝ〜ねゝ上をいつんゞやゐ ねゝハゐ斬ゝて米八のをうゝ
附ゐく来ゐのゐ金の部食をゐやくゐ世ゐ。おゝ女お屋
さんの方へ一旦ゆさねゝけまゐ男ゞゐねゝといつハ
実同実ハどゐゐ気がゐめゐゐゐ「ゐあゞ丑丹「ゞ
正のつく一日婚ゐ他コゐるおめゝ女他ゝ中ゝゐ教ゝて三
気ゐうつゐゐ〜ねゝどゐゐ他ゞ兄ゐおくめゝとおのと

夜も夢に見てゐられねへ時もんでもあるものを　長「ヲヤ
嘘だよウそれほんとうに　丹「ナニ嘘じやアねへ丁度今夜の様な
ことがあるから油断はならねへ　長「イヽエ米八さんが気を
くるものだから随分お出のだヨ　丹「ナニそうじやアねへ。
おめへの所よりおめへがじきに所へ約束して此娘お座で
待合せるのだからなかるもんだおめへア待
部屋へ行ても立てあればすがりつき　長「ナゼマアそんなに云
そんなことを言ごねへト胴をふるはし　身をふるはし

去く温泉の国元へ尋ねんのりあのねさ涙をさへ地がおちる
ゆゑくねどりでもまだ丹次郎　丹「おめへのことは堪忍
しておくれ。今まで苦ぐと二人でてもおまへんじやア
おめへ此所に苦労させて待つもの辛抱してくんな。
其うちにはどうかして妹んを出さうか　長「ナニ今まで
理に兄さんのお側へ行きとすればもう二日三日うちに
ぐらひまちよくでも身が見くもる様子かとれねへト抱
付る苦ろしくさつて秋の夜の頂ふけわたる

生の者の外つゝ産婆のさもやうと喚。さきをやとも繰五七
糸巻のしろく連なり
「嘆かも乳ぶてゞ辯ぐるまでのきぐまたぶ
表んとして接男れ弟しまんかるまてぐえんうま
丹「あるまやしての婦人川の取者さんと夫者さんでくれ
廿「てそうぶ、あるまやしょ 丹「おめへ何ぢ滑ろう「て仲
町の今ゆさんと趣合で琴貴をうるやしょ。とまぐ
けまぐ今夜のようみ。たやぐしのお産婆でくれ乳なまへ

ぐよもぐまろうとんはやうであるまやしょ。晩と国士へうくと。
前後ことまて男見合。何りのひとたびとぐ産婆
みく。ぐ一の。間わどもさぐ藝者の関る
「嘆まてあぐまて男髪ろれ今暫あぐてぐれとを
おろり
「ぬのあるぐ男のまんるとまるまるあれば男嘆ることを
だぐ優ぐろ
「ア」お関ようとまさんあのようの喚くのものを強さおれ

きんハ米八さんがあるうゝ私のエハどかしてもいやだ
てハおきれどやうるヨヨ　丹「ナラく男の出をとらハたれるを
いつの実があるうゝおとろくとどまるゝハ男のつゞけゞ
くゝ。別の男の出をとらハたれ人　也「ヨやく嬉だろうを。
兄イさんが来るひまのるのとらハ米八さんのことサト
ひるゞゝ丹次帝が照の下をとゞる　丹「アレサ何をする
くをゞのくゝ。ハナ。よくゝヨ。ドレおあんまをゞるヨト横
抱こせ　お長が袖くゝ自分の足く乳をあゞれバ「ア

ヲレくをゞるくゝヨトのあるゞゝ顔をあくくして丹次帝が
顔をゞ見つめてある　丹「ハテナ　仲之丞が来んとしくく
三味線の音ハきとくうをひゞく。節回笑ひ声が聞くゝゞ。
櫻川の芸尽くしでもまだまつくゝ和くん　也「イヱ嬉
胡蝶の舞くくゝ昼間も胡蝶が形内のまつく
ゝを来るゞゝ。笠ハ来ろくヨ　丹「フウムそのうを
流の中でハ胡蝶が一だん上手にるりそのゞ　也「きまく
来るひゞおとうくれうよるを　丹「あんゞ嬉くを覚る

今思へバ男ぶり我賞るのうらやみしてやそれゆゑの戯作を業
とせしいつの間にか惚気をかきてゐるの「ヨヤく嘘をかくき十二枝
婦に惚るゝのゝ子エ拾捨八私の友達のかゝ戯作人とのかゝぶんざいぶ
惚るゝおかしきんべこらうはよかろうしい婚でござりますヨ「ト河く
ある情通しでもなかうまくいつてヨそれさん是程あふ式根よ苦
労をいくらうたいヨーぬらしい「おらハ又かくらうしヽドレ拾捨子晩
しうかもちつ又か仕古戯見かゝト機嫌よくなりてゝ「アレマアお教しトかゝる
むそしやうじをあけまるかざしを級綱のそ京の夜に渡をどひつまりとるそとまち中の

恋の山法のかくし憂て我折る紗の奥底とぞいへるも
拳の津く人もなく彼人ともこまで尋ねこなたを書とけり
作者伏て申ゆる紗の状を述て草紙となんて婦女
し子供の門く乱れ紙とし此等しの門とも中ゝむ
嗚しとのか人の鳴呼しぶるる古人やるでく三人
の紗のひをせりてでも浴ぞそ我師とせると前と讃子因縁の
風俗見て我風俗せと元来手著を草紙大男女婦
今の看覚をてりとして渡ぞまべ其拙種なるその字

ゝゝどさまで婦行の如きを信ゝ貞操節義の深
情のゝ一婦ゝゝく数夫ゝ変りいやゝしくも今の為ゝ欲
情を慎し校乃のふるまひ我ゝ如乃ゝ夫ゝるのを
ちるさび巷中艶語多ゝしとゝども男女の志清白と
濁るなとゝゝで○けゝ系○蜘蛛○放田○家八○宇人女流
ゝゝくゝその風姿異なるとども貞烈のゝとゝだゝくゝしゝく
大ゝまゝ如どあゝ満尾の河ゝゝうて妖艶ゝゝくゝよく
其男とゝりて失ゝき我乃るゝゝ

第十四齣

見まゝゝで何の苦も彩き水鳥の笑ふ如ゝき思ひ
ゝゝ人間さるゝゝの活業あるゝ中ゝも他見ゝ楽ゝ
小ゝきゝ風俗とゝゝやゝしゝくも思ゝゝその為ゝりて
月ゝるゝゝ松姫織の花色東式第古織ゝ系八文の結
帯せゝ嬢ゝもゝゝる業ゝゝ世の中我渡ゝ筋の
糸ゝゝ形き妓女の為ゝゝゝ我ゝ出ゝの
幸苦ゝゝ白ゝ庭浦の紅ゝゝ遠ゝゝに寸ゝ

座が淋しくなりにける客の調子にかまはず通子客の気
にあはぬ野暮と洒落との間にて心浅はかの客どもう
七色声のごとく変りて一人間のまね吹替をりかへしま
なる気合の席に罪をもたらすまでひきおこる禍と
引ざる客いでゝね庭に枯芝見んと握る枝の酬にあづ
ま河上の舟の見えぬ遠へのぞ山ぞ富士もと富士筑波今出
現銭せしこゝなかやら不興気なげに素見も野暮か
只欲かしき宝さまも清くや半纏の古身の雁木ぞあるべく

上る野分の風に奥福ある入相鐘きこゆる一やの掛茶亭
驚と家代にかりたき心も知らぬ半可通の客は着物も
或親の秘蔵娘なる芸者ぶしく悪口そしる寄芳と
おもへり嗚呼悲しひなとと筆すゝけば雑わとさる色
実情と見せし虚計なりこまよそれ更ある扱ども苦
界は同じ米八が義理と情の柵に自ら身をそ比良岸
の座舗の一ト間茂き橋がいつも長橋の橋柱くらそよい残
る恩の高比言あらけして無理のほかに砕く倒ましし

[illegible]の初ぢ枕せ〜[illegible]ふまんぞりとしく見かへ
まづ誰ぞ[illegible]一冊の小本[illegible]繰へ〜小
[illegible]に[illegible]八女の[illegible]○こまとりハ案八ぞ[illegible]見まべ〜
○仙女書[illegible]
「女[illegible]とまか○十[illegible]
の兎「[illegible]ん[illegible]「アノ[illegible]この白粉とやる
かう毎日[illegible]ちの八[illegible]菜ぞ
[illegible]の[illegible]く[illegible]の[illegible]猛物が[illegible]よそして此の
[illegible]「[illegible]

[illegible]「仙女書[illegible]
ハヨ坊さんに[illegible]とその[illegible]の[illegible]ヨそ
まぞ今ハ眼[illegible]ぐもの[illegible]眼[illegible]ぐ見か
いけやう[illegible]をきらく坊さんよんかト言まそ
兎ハ考へ[illegible]「坊さんよ[illegible]可[illegible]ぐつて
[illegible]ヨ「兎「そんなうびうさんよりもそう実ハ仙女書
も面もおんなまり[illegible]「アいてるごのうサアいてくれ
[illegible]ぐ[illegible]

ゆ〳〵坊主になる兎八張上に身を横たへて涙出し

兎　こちきやアいやでございまを絵を返し〳〵もう前の

通りこしておくんなイまし〳〵ヨウリト　だゞ〳〵しい利てを

きろくどうするのゝトコロヒヨウ〳〵兎さん〳〵

ちよの月と書く月なまつ〳〵トうけて切ル兎八おろく

なきごゑ　なきごゑ　ちざ兎

涙拭ふゝゆる外産兎の唄　一　憂てとの新吏はゝり〳〵

兎のこゝをとめたる三人ゞ中に　畧　○山方のざ〳〵ゆのもんん

八年ごろ十八九きりやうふ故人の暗考成生うつ〳〵繁を

別居ゝに結ぶくさ〳〵あのも流よ見え給え雲より白く

ゆゝに移ゝく憂あげゝる兎紀女貴成すりこゝ〳〵落

化粧ハゝきゝゝ更ゆ〳〵く唐更紗の額切くまびろうど

ちゝやろきんもうる　ひゝぐ

と白の宋北宋色織の平等をあの厚具をさゝゝて産業

きゝまのゝ丘おゝ三ゝの上に行ひざゝく居る客ハ息を操む

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

夢ゝのあゝ月ゝ風流ハゝゝゝ丸ッの附ゝ家

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

門何のとゝくゝゝぐ〳〵く書くの新造門高やうの高成

延ゝく関成ゝくゝあゝ高ゝ風ゝ外の清ゝ　一　金髪書成

名譽
藝妓ポ
亀戸の

訳のうちハ嘆きのまだ七ツ半過て歩行の鐘の打に結
咽喉を通るの風のかよひもおそき湯水の澤も半七が△「アレあの津
るハお花半七が情死のところ名も紅葉の小六お花山「其
ねも似た名の半兵衛さん「アヽ誰もつまらぬことを 文句
しど鐘の 花「代り知らぬ事やせんとかふ不埒く数々さん
さんし「ホヽ三十まで人の身のうちの目とても長く
少しの苦痛もないしやト屏風と目を指くし引出し
刀を抜て手を添ハ涙よりよく見えてる所に

和尚ハ障子の外より「了簡ちがひさつしやるな短気でござる
八幡まかせねこの筒ぬけさうへ兎も角もト障子を引あけかおし
あけて二人が中へ投込一通こそ花山が年季証文義理ゆへ人に
不義上とつくと読でホツと息 半「こりやこれまでの年季状
花「今の和尚様ハ花町さんの客人で有ハ上ツさ
番頭風情私のことをいふくしと嘆きまし とおつしやてござんす
半「ハテ ナアそこまでが忠七があのもいふ仕切か 花「その人
きんハぶんぶんと 半「家内の者まりの先代親父が秘蔵の

山嵐その名も忠義の忠七ガハテ乙治ねけ場の始末〱この
読文ゲ五イもまぶ死ゑでもよろあを生き義さん〱ホンニこまと
でハ死ビとも泡よこまハ 作者曰めでたしく
見より後編ふハしく入出候ト
ト後ろ門ハく米八ダ〱ヨヤ丑ってうしの作者の癖ゴヨモウ
山わとハ多いの〱極〱ト獨言のひ茂言張見まぶ酒ゑ三雑
ゑく極ひるいびきの奇なり〱アけ幸を見るつけひびりハ
山ゑさんアノ奇性ごけ今更こうも知ってゐる絵茂の生さん

おこ二人とりふひよっとマアこの幸に生ふ茂ってサアあく茂と
もいうまゑ、〱モ茂さんお目ガ〱こあ〱ゑ茂ってゑく笑ってゑ
笑ずとも知ってゐるアノ山ゑガ家出〱ろう世結ゆもゑッと絵
茂の生ゑ零落〱ても家出さぶ義理と端ゑとさ二
原ふ諸分を知ってこゑっくんと奇性茂笑さ山茂ゑふ〱て
見ゑハコリ米八マア山ゑ義理ハいる茂〱よりゑとふこまぶ
も沙原ごゑまっさん知ハ泡くも女の言茂ごゑも返事の出で
素ゑい義理とおゆっくびぶ堪忍〱て茂ゑ義理情のころのま

ぶぶとりいとを引き地の上にくるまるこどもの声

「おりろアや出免ごョウ」

作者狂訓亭がこの草子稿成はぐるの日ゴ雪降まれば
うしやの駕向嶽の舟の文臣とよきまとく友人のざまちこ

琴通舎主人

秋はぎ月をくれ竹の葉ごの露ふるまで鶯の

楽かな人ゝ多賀を寿ぐ鶯

金龍山人

春水再識

春色梅児誓美巻の七了